

第5回森と水の源流館授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 2019年1月06日(日)13時～15時
- ◇会場 川上村森と水の源流館「川上村劇場」
- ◇参加者 尾上・木村・上西・古山(森と水の源流館)
新宮(平城小)・島(郡山西小学校)・奥田(関西学院大)・赤松(和歌山市立有功東)
川崎(川上小)・北村・中澤(奈良教育大学)

◇内容：実践報告の報告・検討

(1) ダムカレーから学ぶ「水源地の森」(川上小5年生：川崎)

○導入：ダムカレーの観察

川上村のダムカレーには3つのダムが表現されている
大滝ダム・大迫ダムはわかるが、3つ目のダムとは何か？
→ 緑のダム(森林)
森林の持つダムのはたらき

○水源地の森のフィールドワーク

(川の色の違い、地面がふかふか・ルーペを使った観察・裸地の川と水源地の森の川の比較)

- ・川上村が10億円で購入・自然豊かな森
(下流の人たちや、未来の人たちのことを考えて購入)

→川上宣言

- ・山の神様
- ・自然を守ることの大切さと難しさ

○村長さんへのインタビュー「川上宣言に関して」←川上村民のアイデンティティのシンボル

○村民へのインタビュー「自然を守るために心掛けていること」

→自分たちも何かしたい・みんなに知ってもらいたいという意識の変化

自分たちで育てているブロッコリーをダムカレーに使ってもらおう(有料)

売り上げを森に寄付したい

ダムカレーにのせるフラッグのデザインの作成、チラシの作成

◇感想・質問

- ・マズローの欲求の階層説 お店の人や地域の人からの承認が自分も何かしたいという気持ちにつながった(自己実現の欲求)のではないだろうか。
- ・授業に入る前の子どもの実態を記録しておき、授業後の変容と比較することで、子ども自身が学びの価値を実感できるとともに、教員にとっても自己の実践を振り返って改善する材料とできる。
- ・地域住民・村長からの聞き取りが子どもに与えた影響：本物の体験
- ・自治体の新しい取組(今回はダムカレー)を教材にすることで、協力も得やすい。
- ・森林の役割を明確に学ぶことができていた。そこからアイデンテ



ィティの形成に発展している。

- ・源流館の専門家と連携したことがよかったのではないか。(地域の教育施設との連携の価値)

(2)「わたしたちの生活をよりよくする政治」(郡山西小6年生:島)

小学校ESD実践における児童の市民的資質

(持続可能な社会の創り手に求められる資質・能力)の育成
社会の動きを自分ごととして捉えて関わっていくことができる力の育成

シティズンシップ教育の理論の援用

- ①地球市民としての資質の育成
- ②民主主義を支える能動的な市民の育成

○人口減少という社会的課題 消滅可能性都市

(5月4日の新聞記事)

人口減少率が高い全国の市町村に10位以内に奈良県の市町村が5つも入っている。

川上村は減少率がトップ⇔ベビーブームでもある

→ 村としての取組があるはずだ 聞き取り調査

市民の願いをふまえた施策を展開している

○郡山市の市政はどうなんだろう?

◇感想・質問

- ・地方自治をとらえる見方・考え方を育てている。
- ・川上村だけでも社会科としての学習として成立している。
- ・川上村を取り上げた学習を学級全体で行い、そこで身につけた学習スキルで郡山市では、グループ単位で取り組ませる。
- ・郡山市を教材化するうえで具体的にとりあげたい施策はあるのか?
- ・人口減少の要因を掘り下げること、学びが深まるのではないか。人口減少の見方・考え方の獲得と、それに対する行政の施策との相互性を学ぶことができる。

(3)「紀の川を探ろう～紀ノ川がつなぐ水とくらし」(有功東小6年:赤松広志)

1学期 千手(せんず)川を探ろう

- ・地域にある川だが、子どもとの心の距離は遠くなっているように感じる
生き物調査・歴史調査(役行者関連)・歩いている人への聞き取り調査
カモの営巣

地域の魅力を見つけることから地域への愛着を育てる

かつて水質が悪化したことがあったが、地域の人々の取組で改善したという歴史

2学期 千手川から紀ノ川へ

- ・紀の川じるしのポスターの提示で「人と川のかかわり」への関心を高めた
上流・中流・下流、林業・農業・漁業
- ・和歌浦(日本遺産)の見学

○しらす漁師さんの横田さんとの出会い 漁船の見学・しらすの試食

「しらすを次世代に残してことが大切だ」

漁の期間を限定、山に木を植える



「和歌浦のアピールが足りない」

でも、しらすをアピールするとしらすを食べる人が増えてしらすが減ってしまうのでは

→ しらすだけでなく和歌浦全体をアピールしたいのでは

・川上村・源流館の見学

川上宣言・水の旅のはなし

○尾上さんへのインタビュー

「森・川・海を大切にしてほしい」「紀の川と人のつながりを知ってほしい」

→ 紀の川を守っていこう ← 横田さんの思いとの共通点

川上村のフィールドワーク よさだけでなく課題も見つける

(人口減少・高齢化・不便)

○エリックさんとの出会い (地域おこし協力隊)

地域おこし協力隊について調べる

エリックさんのインターネットで調べる、その後電話で、連絡を取りエリックさんと村上さん (元地域おこし協力隊) に学校に来てもらう。

- ・地域を元気にする活動
- ・地域行事などへの参加
- ・地域の人との交流

→ 人に喜んでもらえる活動っていいな

- ・エリックさん：協力隊を終えた後も川上村に住みたい
- ・村上さん：デザイナーとして川上村のために関わっていききたい

2人からの宿題

- ・六十谷のいいところを教えてください どの地域にもそこにしかない魅力がある

○出会った人に共通するもの

自分の地域を盛り上げたい、大切にしたい

◇感想・質問

- ・上流・下流の人のつながりに焦点化された実践だった。中流の人との交流もあれば。
- ・子どもの声や視点をくみとった実践だと思った。
- ・人の思いは子どもたちに伝わっている。
- ・感心・あこがれから子どもたちの行動化が生じている。
- ・地域から始めて地域に戻る学習が行動化につながる (空中戦をさけることができる)

(4) 源流館と共同研究した総合的な学習の時間 (平城小4年生)

水道水を入りに

上水 きれいな水を 川上村

下水 きれいな水に 浄水場

秋篠川の生態系調査 (谷幸三氏)

源流館でのフィールド体験

きれいな川での生き物調査

生き物調査の楽しさ、比較のおもしろさ、違いの要因を川だけでなく、広い視野でとらえる



音無川と秋篠川の共通点を見つけよう

ややきれいな水にいる生き物が多い。

人と自然のかかわりは一筋縄ではいかない

◇感想と質問

- ・ 専門家と連携することで科学的知識を授業に生かすことができる
 - ・ かつての秋篠川に関する聞き取り調査・時間軸を入れることでE S Dとして行動化を促進できるのではないか。(かつての遊べる川に戻したい)
 - ・ 「きれい」「きたない」の言葉が先入観を生んでしまうので、言葉の定義を子どもたちと共有することが必要。
 - ・ 「きれい」な水、その背景となる豊かな自然環境にも目を向ける。
 - ・ 周辺環境が同じでも水質が違うところ その理由を考える。
 - ・ 一緒に勉強していくというスタンスで取り組むことが大切
- (5)「資料を生かして考えたことを書こう」(平城小学校 5年生国語科・新宮)

- ・ 木使い運動の発展
- ・ ポスターで表現する(資料を活用し文章を作成する)

源流館のポスターの製作者：尾上さんの教材化

思いが伝わるポスターになっているか

言葉を磨く

ポスターに込められた思いを知ることから。

◇感想・質問

- ・ まず伝えたい思いを明確にすることが大切。
- ・ 木使い運動とは違うポスターを教材に、尾上さんに作成に関わったの思いを話してもらう。
- ・ 導入：まず気に入ったポスター・チラシを児童に持ってきてもらって、その理由を説明させる
- ・ 教科書越えが意欲化になる

